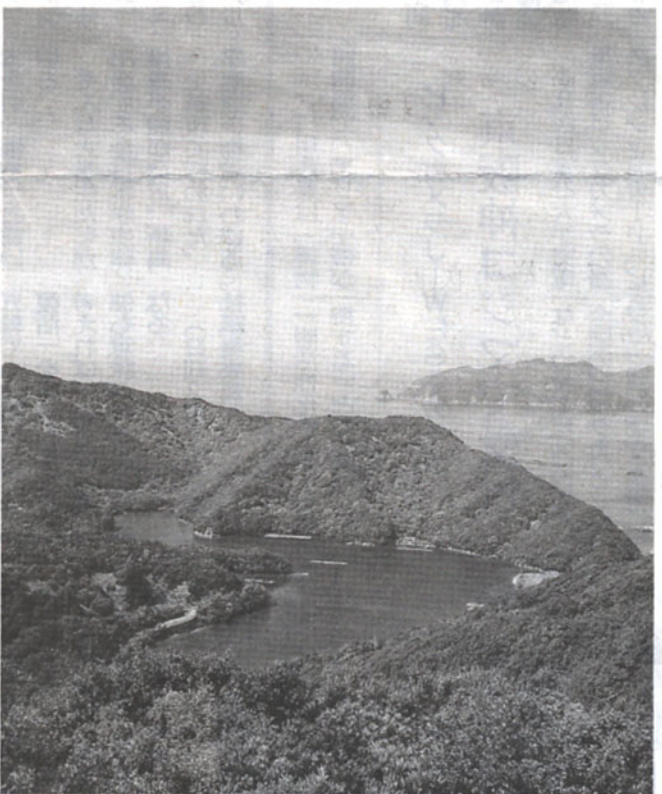


地域の自立支える「安全・安心」へ

人口減少や高齢化が進む日本の地方圏では、防災・減災にも工夫が求められる。三重県南部・人口1万3000人の南伊勢町は「強靱なまちづくり」をモットーに、本来的な防災・減災に加え、公共交通の確保や農林水産業を中心とする地域産業の振興、さらには広域観光の推進も「まちを強靱化する手段」と位置付けて力を入れる。現在1万3000人の人口が2030年には1万人を切り、高齢化率は5割を超すというシンクタンクの将来予測もある中で、同町の強靱化策は目標に掲げる「安全・安心を実現し、希望を持って誇れる南伊勢町」を実現するのが最大の目的だ。

津波予測20%超

南勢町と南島町が2005年10月、平成の大合併で誕生した南伊勢町。リアス式海岸の同町は、南海トラフ地震が発生すると高さ20層を超える津波に見舞われるとの予測もあり、強靱なまちづくりは住民の命を守るための最重要課題といえる。同町の「強靱なまち



三重県南伊勢町

づくり計画」は、期待効果として一般的な防災・減災ばかりでなく、①若者の定住促進・人口減少対策②地域経済の活性化③雇用機会の創出④地域社会の活力向上⑤地場産品の販路拡大⑥地域観光の振興——などを例示する。産業にしても、観光にしても、すべての基盤は地域の安全・安心にあると考えるからだ。

具体的に取り組んだのが町役場や公共施設の高台移転で、小学校3校や保育園8園の移転を昨年4月までに完了。避難場所としての防災公園や災害時用ヘリポートも施設を整えた。防災無線は音声とともに、文字情報も送れるタイプを用意。東日本大震災時、緊急避難情報を聞き取れなかった住民が一定数いたことを教訓とした。交通は災害時はもちろん

地域活性化支援センターから今年4月、愛を告白する「恋人の聖地」に選ばれた南伊勢町の「ハートの入り江」。上からの眺めは池のように見える。展望台の案内板にはハートの上で2つの手が重なる絵に添えて、「想いが届くハートの入り江・かさらぎ池。やさしくハートの上で手を添えてね!」の説明文が

〜~~~~
ん、日常的にライフラインの機能を持つ。高齢者は自家用車を所有・運転しない人も多く、自由な移動が不可能になると、たちまち生活に行き詰まる。南伊勢町には鉄道路線がなく、公共交通の柱はワゴン車を使ったデマンドバス。事前に依頼すれば自宅の最寄りまで迎えに来てくれるデマンドバスは、高齢者に外出機会を通じた生きがいを提供するが、一方で、法律の壁もある。法令で運行範囲が町内に限定されるため、隣町の病院への通院には使えない。同町は規制緩和を訴えている。

もう一つ、地域の自立を支えるのが観光振興だ。南伊勢町は多島美で知られる志摩市に隣接するほか、2013年には20年に一度の式年遷宮に沸いた伊勢神宮に近く、観光客を呼び込める素地は整う。同町は、ハート形をしていることから通称「ハートの入り江」と呼ばれるかさらぎ池に展望台やトイレを整備することで、継続的な観光客誘致を目指す。

地方圏のモデル

南伊勢町の取り組みは地方圏の自治体のモデルとされ、小山巧町長は先に東京都内で開かれた国土強靱化フォーラムで施策を発表した。